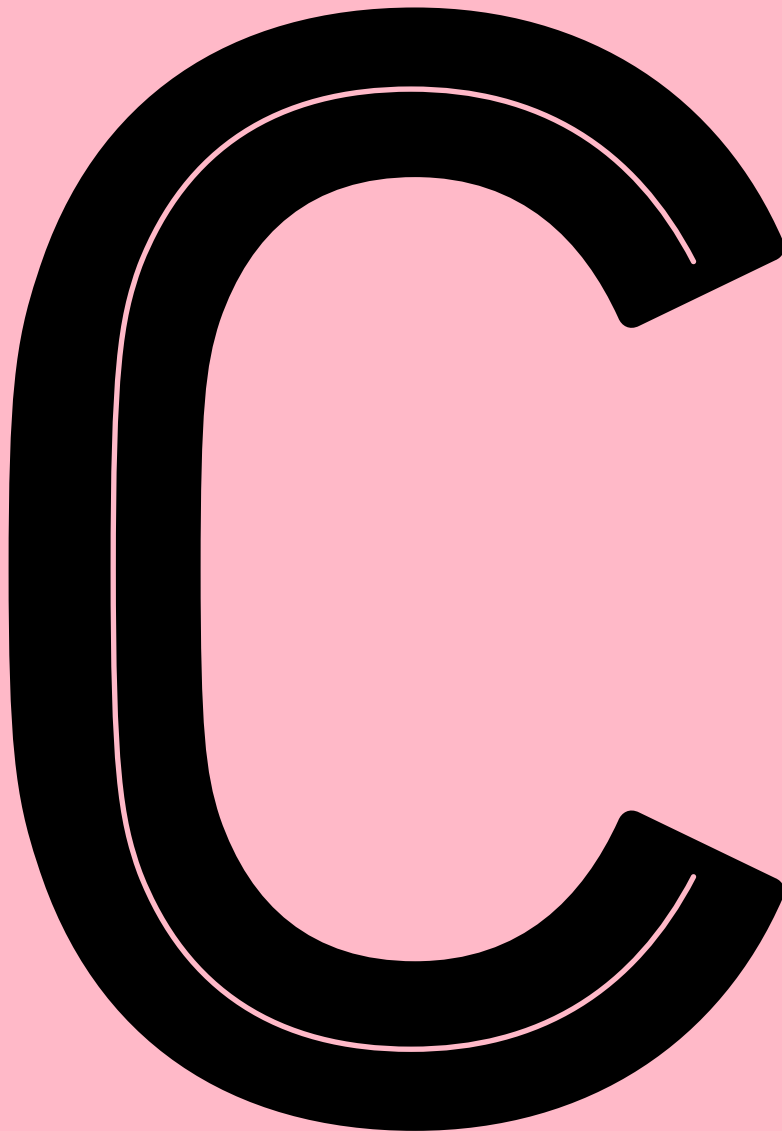


paper



no.008



松本雄吉 × 雨森信  
(雑新派) (アートディレクター)



オープン北加賀屋



山下裕子 (全国まちなか広場研究会)  
樋口貞幸 (アートアドミニストレーター)



伊賀陽祐・青野信仁  
(電化美術)



## 松本雄吉 × 雨森信

(維新派)

(アートディレクター)

異なる活動領域を持つ2人による対談企画「CO-DIALOGUE」。8回目となる今回は、大阪を拠点に国内外で舞台公演を行う維新派主宰・松本雄吉氏、2003年より西成区・山王を拠点に展開する「プレーカープロジェクト」の企画運営を行う雨森信氏を招き、それぞれが考える「ローカリティとアート」についてお話いただいた。

### 歩くことで身体に取り込む

**松本**：僕は維新派の作品演出をするときなど、その地域から何がしかのテーマを得るため、とにかく歩くんですよ。場所にこだわるといふより、場所や土地との身体的な関わりに興味があって。

**雨森**：「プレーカープロジェクト」では、現在、西成区山王を中心に地域に根ざした活動をしていて、作家とプロジェクトをはじめるときには、必ず最初にまちを歩きます。身体を通してその場所を感じ、何かを発見していくことが私も重要だと思っていて。松本さんの舞台は、琵琶湖でも犬島でも場所性を強く意識しているのかなと。

**松本**：そうかもしれませんね。1960年代、「THE PLAY」というハブニンググループがいて、個人的に手伝っていたんですよ。彼らのスタイルをマネして劇団員10人、参加者20人ほどで大阪から高野山の頂上まで2昼夜かけて延々と歩いたこともあります。

**雨森**：すごい(笑)。その道中でパフォーマンスを行うのですか？

**松本**：いえいえ、なんでもない話をしながらずっと歩くだけ。ウォーキングハイというのか、みんな変な高揚感が芽生えてきて、車が向かって来ても怖くなくなったり、高揚し過ぎて崖から落ちそうになったり……。今思えば危険なイベントでした(笑)。

**雨森**：斬新なイベントですね。舞台作品というよりは、限界に挑戦する修行のような……。とにかく歩き続けたんですね。

**松本**：僕はね、“路地”が好きなんです。都市的な空間・現象という意味に興味深くて。ただ“路地”を語るうえでの語り口は、表通りに対する裏通りの思想であったり、身体的な距離感だったりさまざまです。しかし、どうもじっくりこない。うまく言語化できないことを臍に落とすため、僕は歩いている気がしますね。

**雨森**：“歩く”って、身体的に情報を獲得していく行為ですよ。

**松本**：歩くことで、入り口となるものが発見できれば良いんです。例えば西成を歩いていて、アスファルトの割れ目から雑草が覗いている景色にはドキッとしますね。戦後の集団就職で地方から出てきた人

や在日の人、西成の住人と雑草が重なって見える。どんな場所でも“草”を見つけるようなささいなことがイメージの源泉になります。

**雨森**：同じエリアでも、違う作家と歩くとまた新しい発見をしていく。風景だけではなくて、人もそう。プロジェクトごとに異なる視点でまちを再認識していけるので、いつも新鮮ですね。

**松本**：僕自身は、まちを読み解く方法のひとつとして歩いています。10時間歩き続けて意識が朦朧とするなか、気づくとおもしろい場所に紛れこんでいるようなことがある。歩くことでまちとのつながりを保っているような気がしますね。

### 完成形にしない場をつくる

**雨森**：維新派の作品は、毎回テーマを設けていますよね。そのテーマは、どのように導き出しているのでしょうか？

**松本**：現場の環境から受ける印象を共有するところからはじめます。出てきた視点をコラージュしながら作品にするんです。例えば、1999年初演の《水街》は、大正区の一部に住み着いた沖縄人のコミュニティ「クブナガー」を題材にしています。彼らは海からの目線で埋め立て前の大阪＝群島を見ている。その気づきを維新派で共有することから作品が生まれました。

**雨森**：最近、松本さん個人で参加された「神戸-アジア コンテンポラリーダンス・フェスティバル#03」の舞台作品では、維新派の作品とも異なる空気感がありましたね。

**松本**：あれは、垣尾優とベトナムの作家ジュン・グエン＝ハツシバとの共同作品でした。最初にテーマを決めるのではなく、観客参加型にしようと思っていたんです。会場近くの港から海水を汲んで、それをお客さんと分配し、最終的にはみんな海に戻す。ハツシバが信じる「輪廻転生」の要素が出たパフォーマンスになったのかなと。身体の一部を分配、交流するような儀式性がありましたね。



**雨森**：それは、囚らずもですか？

**松本**：そうですね。この作品では、見せるための舞台という意識が僕自身あまりなく、非日常的なハブニングを起こす感覚でいました。特に3.11以降、さまざまな問題に対してみなさん敏感で、何をしても意味を感じ取ってそれぞれで解釈してもらえる。水を素材に、ある種の根源的な思考へ働きかけたのかもしれないですね。

**雨森**：どこまでが作品で、どうなったら完成なのか、境界の揺らぎや曖昧さがありましたね。この3月に開催した梅田哲也の「0才」に近いものを感じます。まちを舞台とした作品で、日常の風景に異質な状況を混在させていくことで、見る人は偶然通りかかる人や猫など、出会うものすべてが現実なのかと疑い出し、そういった断片からそれぞれの物語を紡いでいくというような……。

**松本**：見る人の数だけ、作品や都市の解釈がある。その差異が見えると、ふっと他人を感じて、その人の気持ちを覗きたくなりますね。

### 都市の猥雑さを育むもの

**松本**：最近、大島渚監督の『太陽の墓場』という映画を観たんです。まさに西成のあたりを撮っているんですよ。どのカットにも通天閣が入っているのが印象的でした。都市の新陳代謝が加速し、記憶にある風景も薄れてゆくなか、個のゆるぎない視点が都市の側面を映し出すのだと感服しましたね。

**雨森**：西成区・山王は、集団就職などで九州や四国からの移住者も多く、すぐ隣の釜ヶ崎にも地方から労働者の人たちが集っていて。そういった人たちの生活の場として都市の風景ががらっと変わっていく時代の人や場所のエネルギーのようなものが映し出されていたんでしょうね。

**松本**：先日、半日くらいかけて通天閣から大阪のまちを眺めていたのですが、改めて雑多で混沌としているまちだなと思いました。

おっしゃったような人の移り変わりが、さまざまな傷やほころびとなってまちに堆積している。ヨーロッパにおける計画都市の魅力とは異なる、無計画都市の魅力とは何やろうと、いつも考えます。

**雨森**：3年ほど前に行った「絶滅危惧・風景」という少し挑発的なタイトルのプロジェクトがあるんですけど、これは、昔ながらの木造長屋や路地が高層マンションに様変わりすることで失われていくのは単にその風景だけではなく、人とまちとの関係やコミュニティの在り方、暮らしそのものが変わってしまうのではないかと、という危惧から発想したものでした。

**松本**：まちの歴史や風格は一朝一夕にできるものではないですよ。最近では、大阪・十三のシオンベン横丁が燃えてしまって泣いている人も多くいます。あの路地は絶対再現できませんから。

**雨森**：その場所性をまちの人たちがどうとらえているかです。まちはそこに住んでいる人の営みとともにつくられていくものだと考えているんですが、見過ごされた価値や歴史を掘り起こし、地域を再発見していくことは、アートの役割のひとつだと思います。まちの未来を想像していくためのきっかけになればいいなと。

**松本**：おそらく都市の魅力は、100年、200年の間、垢まみれになって、潰れて再生して、引っつけて剥がして……という彫刻的な作業を経て、痛みや傷が折り重なりはじめてできてくるのかなと。大阪というまちはまさにその集積地と言えるでしょうね。

松本雄吉  
Yukichi Matsumoto

1946年熊本県天草生まれ。大阪教育大学で美術を専攻。1970年劇団維新派を結成。圧倒的な舞台美術や変拍子の音楽。単語に分解されたセリフを大阪弁で発話するスタイル「チャンチャン☆オペラ」で注目を浴びる。今秋10月には、大阪で10年ぶりの野外公演を中之島GATE(地下鉄阿波座駅から徒歩10分)で行う。

雨森信  
Nov Amenomori

1969年生まれ。京都市立芸術大学卒業後、設計事務所、ギャラリーでの勤務を経て、インディペンデントキュレーターとして活動。2003年より「プレーカープロジェクト」のディレクターとして、地域密着型のアートプロジェクトに取り組み、現代社会における「芸術の役割」「芸術と社会の有効な関係」を探索する。



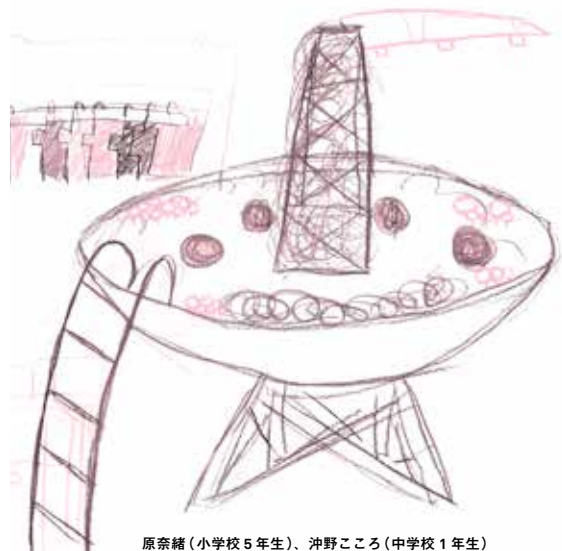
## オープン北加賀屋 地域の出来事をひらく、伝える

### おとなとこどもの 北加賀屋みんなのうえん日記

みんなのうえんの大人・子どもメンバーが綴る農園の日々

#### 春のみんなのうえん ワクワク計画

Date 2014.4.12 Venue みんなのうえん第2農園



原奈緒(小学校5年生)、沖野こころ(中学校1年生)  
たねをニコちゃんの形に植えました。「みんなしめじ」も生えています。ぜひ見に来てください。

みんなのうえんに種まきの時期がきました。今年の夏は「イタリアンうね」が私のチームのテーマです。そして早い収穫の物の後は「中華うね」に変身するという計画！種まきに備えた土づくりでは、私たちの頼れる男・石山陽介さんのつくる、土を元気にする資材と牛糞を混ぜグルグル耕して、しばらくは有機物が分解してフカフカな土になることを祈りながら見守ります。そうして土のなかで微生物が元気に働いている間に、私たちは種や苗を手配し育て方を調べ、つくれる料理を想像し、ワクワクします。美味しい野菜が簡単でないのはわかってる。でも今は豊作野菜をほおぼる自分しか想像できない！みんなのうえん夏野菜の夢満開中！

中内美穂(みんなのうえんくうねるチームメンバー)  
好きな野菜はニンジンです。特にそのままフライして食べると最高！



L M

### コーポ北加賀屋のいま

多分野で活躍する協働スタジオの動き



#### DESIGNEAST05 CAMP 出発式

Date 2014.03.30 Venue コーポ北加賀屋

今年で6回目となるDESIGNEASTは日本各地を旅する「DESIGN EAST05 CAMP」として開催。その出発式に参加した。大阪発信の出来事から、その輪は徐々に広がり、ひとつのプラットフォームとなっている。今年のカAMPでは、各地で新しい輪が生まれ、広がりが増すだろう。DESIGNEASTによって生まれた状況や関係性は、僕らの財産だ。同時に、僕らはそれを活かし、デザインの状況をどうとらえて活動するのかという問いを常に投げかけられている。あと5年で終焉を迎えるDESIGNEAST。身の引き締まる会だった。

CAMP出発式: DESIGNEAST実行委員会によるプレゼンテーション CAMP TALK: 山道拓人(ツバメアーキテツ)× 飯田将平(デザイナー) FOOD: 森林食堂 / BAR tatjana

田原奈央子(graf)  
武庫川女子大学卒業後、grafにて企画制作・広報を担当。学生時代DESIGNEASTにスタッフとして、以降はgrafとして参画している。

### 素晴らしきまちかど芸術

公共空間における珍風景を巡る

#### 木津川沿いの人面倉庫

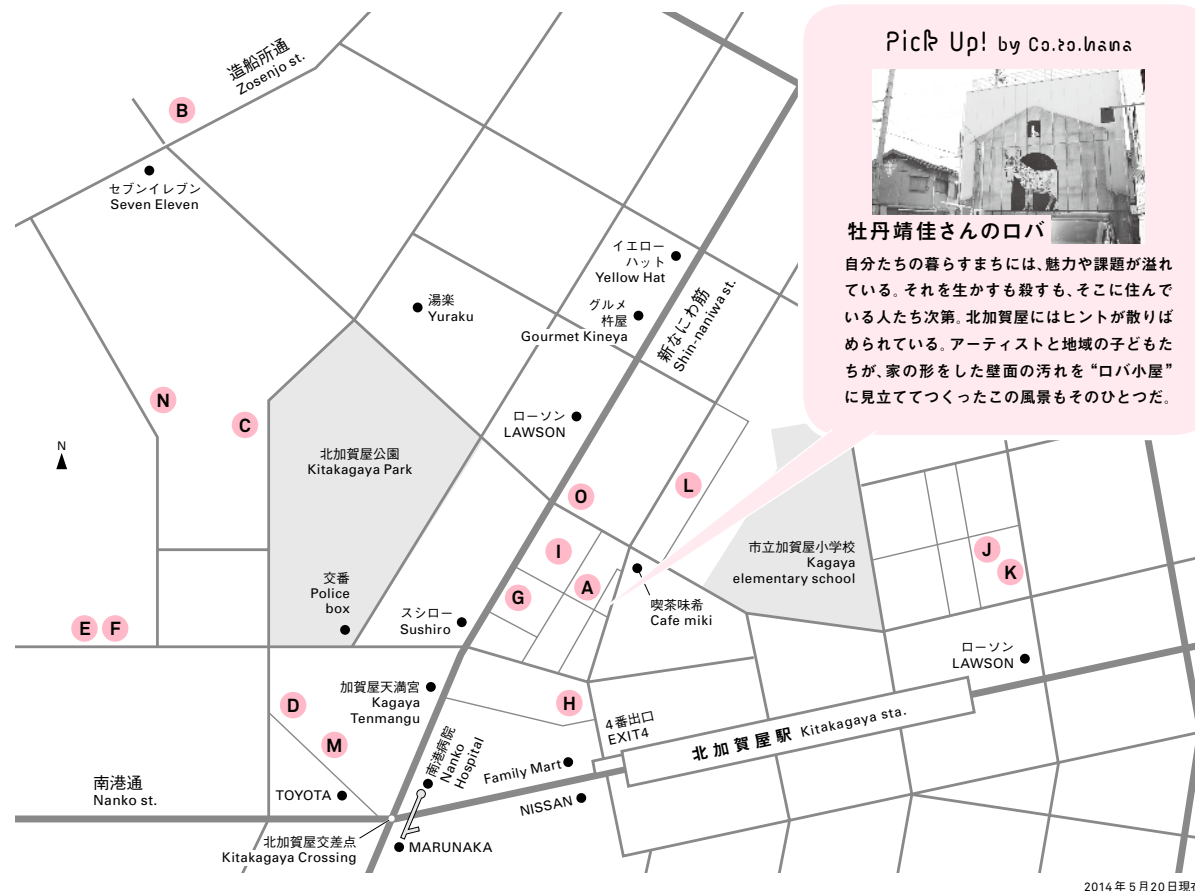


搬入の都合で2階に出入口を設置することはあるらしいのだが、それにしてもシャッターを見上げる経験はなかなかない。荷物を運び込むのを想像すると大きい口のように。そう見るとタンの年季の入りが老人みたくにも見えてくる。

有佐祐樹(MAD荘管理人)  
コーポ北加賀屋に住んでいます。グラフィックデザイナー、愛猫家。

C

おおさか創造千島財団では、芸術・文化が集積する創造拠点として再生が進んでいる北加賀屋エリアを、大阪における創造拠点のモデルケースとして、情報発信/ネットワーキングの支援を行っています。



#### Pick Up! by Co.to.hana



#### 牡丹靖佳さんのロバ

自分たちの暮らすまちには、魅力や課題が溢れている。それを生かすも殺すも、そこに住んでいる人たち次第。北加賀屋にはヒントが散りばめられている。アーティストと地域の子どもたちが、家の形をした壁面の汚れを“ロバ小屋”に見立ててつくったこの風景もそのひとつだ。

2014年5月20日現在

### Viewpoint from Overseas

#### 異なるものの相乗効果

北加賀屋には、徒歩圏内に共存する圧倒的な工業団地群と小さな居住空間のエリア、2つの異なる都市空間にアートスペースとの興味深いコンビネーションが存在します。オルタナティブスペースの多様性を反映した異なる環境が、来訪者に豊かな都市と芸術体験を提供しています。

マリア・クラウジア・デ・ソウザ  
1982年ブラジル生まれ。2008年より2014年まで東京大学に在籍し、都市再生の研究を行う。



- [A] ク・ビレ邸[インフォメーションセンター]北加賀屋2-8-8 quvillezthe.wordpress.com
- [B] クリエイティブセンター大阪(CCO)[複合アートスペース]  
北加賀屋4-1-55名村造船所大阪工場跡地 www.namura.cc/
- [C] コーポ北加賀屋[協働スタジオ]北加賀屋5-4-12 www.coop-kitakagaya.blogspot.jp/
- [D] おしま絵画教室[アトリエ]北加賀屋5-2-31 www.takayukioshima.jimdo.com/
- [E] 芸術中心●カナリヤ条約[アートスタジオ]北加賀屋5-5-35 canaryconvention.wordpress.com/
- [F] 鞆籠館[シェアハウス]北加賀屋5-5-35
- [G] AIR大阪(アーティスト・イン・レジデンス大阪)[宿泊施設]北加賀屋2-9-19 airosaka.com/
- [H] Co.to.hana(コトハナ)[デザインオフィス]北加賀屋2-10-21 www.cotohana.jp/
- [I] 隠れ屋1632秘密基地[手づくりメガネ&アクセサリー]北加賀屋2-8-9 www.kakureya1632.com/
- [J] CAFÉ DJANGO[自家焙煎コーヒー店]北加賀屋1-6-28カガ第2ビル1F www.django.jp/
- [K] 騒ギニ乗ジテ[ギャラリー・バー]北加賀屋1-6-1カガ第1ビル1F sawaginijoute.jimdo.com/
- [L] 北加賀屋みんなのうえん①[コミュニティファーム]北加賀屋2-4-6 minnanouen.jp/
- [M] 北加賀屋みんなのうえん②[コミュニティファーム]北加賀屋5-2-27 minnanouen.jp/
- [N] メガアート倉庫(仮)[オープン・ストレージ]北加賀屋5-4-48
- [O] b(フラット)Gallery[カフェ・ギャラリー]北加賀屋2-3-17 flat9gallery.wix.com/flatgallery

※ご見学希望の場合は、事前に Webなどで情報を確認いただくか、各施設にお問い合わせください。





## リレーコラム つないで見える、人とまちの多彩なあり方

### まちなか広場のあるマチ

山下 裕子

Yuko Yamashita



1974年生まれ。2007年5月富山市まちなか賑わい広場ランドプラザ運営事務所。2011年11月NPO法人GPネットワーク理事。2014年4月(株)ハイマート久留米ひと・ネットワーククリエイター。著書に「にぎわいの場 富山ランドプラザ―稼働率100%の公共空間のつくり方」(2013年、学芸出版社)。

> 山下さんが選ぶ次のコラムニストは…  
服部彰治氏(札幌大通まちづくり株式会社)  
ヒト・モノ・コトを横につなげてみよう！と企みあちらこちらへと、よく動く仲間です。(山下)

### 慎ましやかに、厚かましく

樋口 貞幸

Sadayuki Higuchi



インディペンデント・アートアドミニストレーターとして、「NAMURA ART MEETING'04-'34」をはじめとするプロジェクトに参加するほか、NPO法人アートNPOリンク常務理事兼事務局長、舞台芸術制作者オープンネットワーク監事(2013-)、NPO法人淡路島アートセンター監事(2013-)、一般社団法人ダンスアンドエンヴァイロメント監事(2012-)などに携わる。

> 樋口さんが選ぶ次のコラムニストは…  
橋本裕介氏(ROOMシアター京都/  
KYOTO EXPERIMENT プログラムディレクター)  
次代を担う希代のパフォーマンス・アーツ・ディレクターです。(樋口)

日常的に人が往来する百貨店と駐車場の間にある中心市街地の超！一等地に、みんなのリビングルームのような広場が富山市にあります。富山市まちなか賑わい広場、愛称「ランドプラザ」です。年度末のある日、長い冬を越した北陸の地富山にやっと訪れた春の陽射しのなか、ランドプラザは幸福感に満ちていました。ステージ上に設えた「つみ木広場」では子どもたちが遊び、つみ木広場を囲むように配置されたベンチには母親たちが子どもを見守りながら歓談しています。そして、大型ビジョンでは春の選抜高校野球が中継され、100席程度あるカフェテーブルでは、親子連れ、会社員、旅人などの多種多様な人々がそれぞれのアクティビティを気持ち良い風にあたりながら自由に、マイペースに行っています。

中心市街地の多くは、公共交通の利便性が良いため車が自由に使えない人も、足腰に少し不自由を感じるようになった高齢者もアプローチしやすいエリアです。そこに「まちなか広場」が整備されれば、公共交通を活用して

「[私]の望む社会が、「あなた」にとって好ましい社会とは限らない。「あなた」のいる社会が、「私」を受け入れるとは限らない。私は「私」が生きてゆける社会を求めている。私は「私」がそのままに生活できる社会を求めている。たとえそれが「あなた」にとって居心地の良い社会ではなかったとしても…。

「私」は社会を変えたい。でも「私」だけでは社会を変えられない。社会を変えるためには、どうしても「あなた」が必要だ。」

\*\*\*

「全国アートNPOフォーラム」の運営に携わって、早10年が過ぎた。神戸を皮切りに、札幌、前橋、青森、別府、洲本、大阪、那覇、舞鶴、鳥取、仙台とめぐり、昨年、神戸に戻った。11年目の今年は、浜松で活動する特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツとともにフォーラムを開催する。そこでは、社会的排除や福祉、幸福をテーマに、対話を積み重ねていくことになるだろう。

実のところ、フォーラムはイベントだけを

出かける機会を生み出します。「出かける」とは、実はそれだけで積極的行動であり、社会的な活動に参加するきっかけをつくるのです。歩いて暮らせるまちづくりを進める富山市においてランドプラザを日々眺めていると、消費行動を伴わなくとも誰もが自由に居心地良くいられる場所の必要性や重要性を感じます。これから求められる都市文化の成熟には、まちなか広場によって創出されるゆとりある「空間」と「時間」が必要であり、そうしたゆとりから人と人が互いを知り、感じ合い、心を通わす「交流」を生み出し、新しい関係性が創出されるのかもしれませんが。富山市の中心市街地では新鮮な交流が生み出され続けることで、新しい自分に出会い続ける人生という名の旅を続ける人たちが増えているのかもしれませんが。そして、私は今日も全国の広場で元気に活動している仲間会う旅を続け、10月3日(金)には新潟県・長岡市「アオーレ長岡」で研究会も開催します。まちなか広場に興味ある仲間たち、待ってます！

やっているわけじゃない。フォーラムをダシに自治体に働きかけることもあれば、地域コミュニティに介入することもあった。市民活動の下支えをしたり、焚き付けたりもしてきた。遺構の保存活動に関与したこともあった。フォーラムで話し合われた内容をもとに政府に提言もした。しかしその活動によって「私」は、社会に何か変化を起こし得たのか。果たして、「私」は何を成し得たのだろう。

10年を経ても「私」の望む社会は実現していない。それでもなお、「私」はフォーラムをやる。対話の場をつくり続ける。「違い」を前提としたつながりを考え続ける。固くなりがちな考えや人間関係が対話によって“揺らぐ姿”は、ただただ美しい。フォーラムには、それがある。

小さく弱い声がかき消されがちな地域社会にあって、「私」はフォーラムの場でささやく。アンビバレントに。できる限り慎ましく、しかしながらどこまでも厚かましく。

## TOPICS from CFCO

おおさか創造千鳥財団(CFCO)は、大阪で行われる芸術・文化活動の支援を通じて、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

## NEWS

### 2014 年度公募助成 対象活動決定

当財団の2014年度公募助成には、計103件の申請があり、選考委員会を経て以下の通り助成活動を決定いたしました。

#### ① 創造活動助成 11件 ※ [ ]内は申請者名

- 野村誠&日本センチュリー交響楽団&スマスタのコミュニティ・プログラム[公益財団法人日本センチュリー交響楽団] ●釜ヶ崎芸術大学inヨコハマトリエンナーレ2014[特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)] ●川上未映子×マームとジブシー一人芝居[マームとジブシー] ●DESIGNEAST05 CAMP[DESIGNEAST実行委員会] ●雑誌『IN/SECTS』の制作、および販売イベントの運営[合同会社インセクツ] ●クルージングアドベンチャー3[劇団子供巨人] ●地域に根ざした創造活動拠点の継続と発展的展開のためのプロジェクト(仮)[プレーカープロジェクト実行委員会] ●タイトル未定[維新派] ●鉄道芸術祭vol.4「音の展覧会」(仮)[アートエリアB1] ●種から育てる子ども料理教室[種から育てる子ども料理教室] ●「わたしのマチオモイ帖」プロジェクト全作品の複写撮影、アーカイブWEB制作[わたしのマチオモイ帖制作委員会]



コカールーム「逆様」展示風景(甲斐美術館、台湾)

#### ② スペース助成 4件 ※ [ ]内は申請者名

- Multus#3「人生を変えてしまうメロディー」第2弾 カント・オスティナート[一般社団法人 torindo] ●第20回日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル(ニパフ'14)[日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル(ニパフ)実行委員会] ●鳥公園#10「空白の色はなにいろか?」工程1[鳥公園] ●関西文化的暴走会[関西文化的暴走会]



torindo《Multus#2》京都公演 2014

## ACTIVITY 2013年度 スペース助成/創造活動助成

### 01 dracom 祭典 2013

「方々ノ態 (in OSAKA, Kitakagaya)」(スペース助成)

http://dracom-pag.org/

いわゆる劇場を出て、最大収容15名のテント内とその周辺で上演をしました。冗談のようなアイデアですが、演劇の本質に気づかせてくれる有意義な作品となりました。今後はほかの場所でも上演したいと考えていますが、どこで上演するにしろ、北加賀屋の風景や匂いが基準になっていくだろうと思います。



文・筒井潤(dracom)

### 02 こども建築ワークショップ

「セバスチャンといちばをつくらう」(創造活動助成)

http://atelierpingouin.blogspot.jp/

建築家セバスチャン・カデによる、こどものための建築ワークショップ。1/100と1/10の縮尺の「いちば」の模型を2日間かけて制作。模型と実物とのズレや遠近感を体験するとともに、光や色、かたち、素材の組み合わせから生まれる空間のつくり方、人が自然に集まる「場」としての建築の在り方を考察しました。



文・町田桂子(こども建築ワークショップ)



## 北加賀屋の発明家たち

2013年1月、北加賀屋に発足した「FabLab Kitakagaya」。必要なものを自分たちの手でつくる、という思想のもと生まれた市民工房の活動を取り上げます。

### File 2

## FRISKマシンの 伊賀陽祐、青野信仁

「電化美術」に所属する伊賀さん、青野さん。電機メーカーのUIデザイナーとして働くかわら、作品発表を行っている。彼らのコラボ作品《man FRISK interface》は、手招きにセンサーが反応、FRISKを口元へ投げ入れてくれるユニークなマシンだ。「おもしろいアイデアを純度高くかたちにできる場があるのは嬉しい」と伊賀さん。FabLabでは、レーザーカッターを用いて構造部を試作。デジタルファブリケーションが暮らしへ浸透しつつある今日、「もの与人との豊かな関係性を見いだすことがデザイナーの本分」と青野さんが話すように、作品と人の関係性も変わりつつある。

### 電化美術

メーカー勤務のユーザーインターフェースデザイナーを中心としたもの／ことづくり集団。2012年より年2回、メンバーの作品展を大阪・阿倍野長屋にて行っている。 <http://www.denbi.org/>

### 伊賀さん、青野さん作 《man FRISK interface》



▼作品の起動ムービーと設計図が下記サイトにて観覧できます！  
<http://www.denbi.org/man-frisk-interface/>

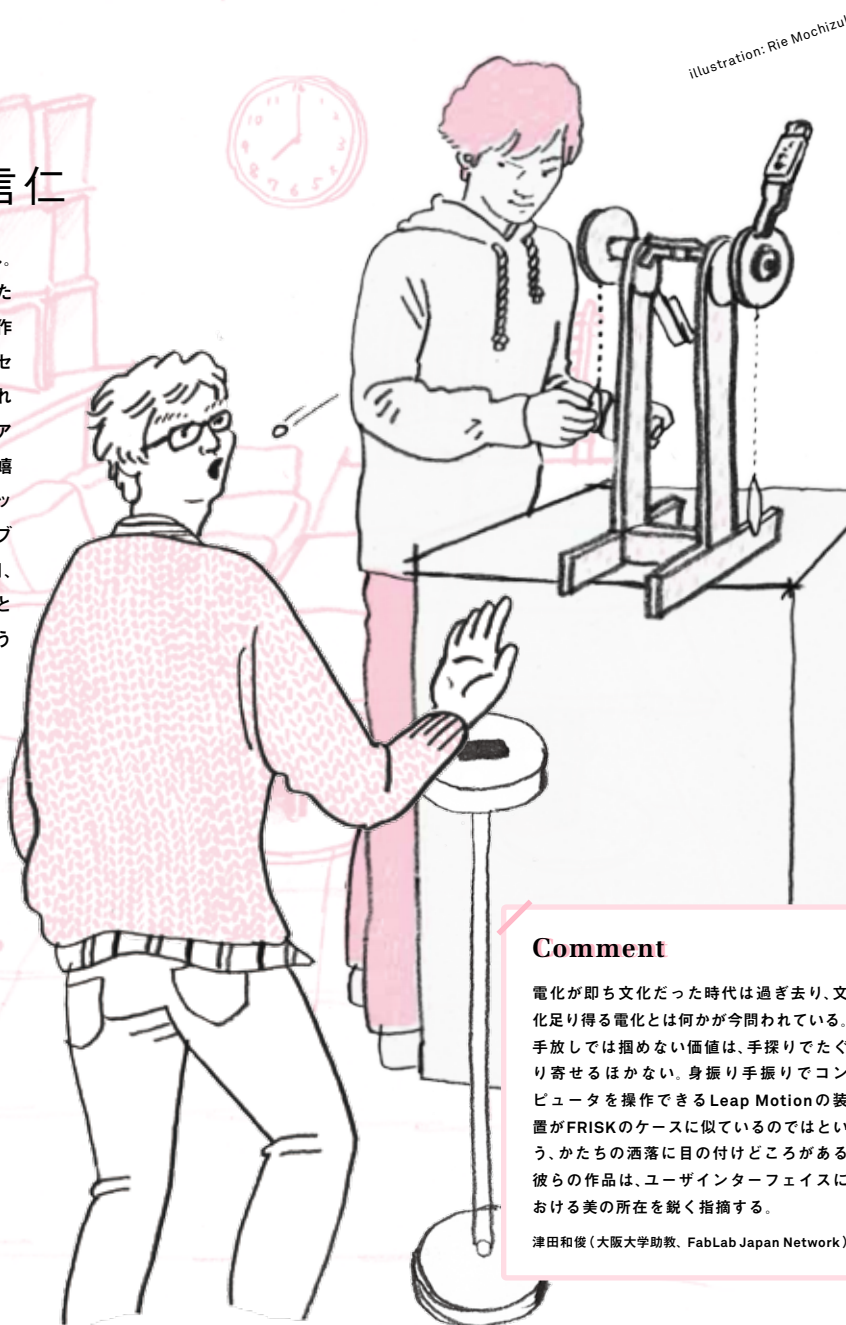


illustration: Rie Mochizuki

### Comment

電化が即ち文化だった時代は過ぎ去り、文化足り得る電化とは何かが今問われている。手放しては掴めない価値は、手探りでたぐり寄せるほかない。身振り手振りでコンピュータを操作できる Leap Motion の装置が FRISK のケースに似ているのではという、かたちの洒落に目の付けどころがある彼らの作品は、ユーザーインターフェイスにおける美の所在を鋭く指摘する。

津田和俊（大阪大学助教、FabLab Japan Network）

paper C No.008  
by Chishima Foundation for Creative Osaka

「paper C」は、おおさか創造千島財団が発行するフリーペーパーです。関西におけるクリエイティブな活動を、財団が拠点を置く大阪・北加賀屋エリアから発信しています。

発行日：2014年5月20日

発行元：一般財団法人 おおさか創造千島財団 事務局

〒559-0011 大阪市住之江区北加賀屋2丁目11番8号千島ビル4階

TEL 06-6681-7806 FAX 06-6681-6188

URL [www.chishimatochi.info/found/](http://www.chishimatochi.info/found/)

編集ディレクション & 編集：多田智美 [MUESUM] 編集：永江大 / 花見堂直恵 [MUESUM]

アートディレクション：原田祐馬 [UMA/design farm] デザイン：廣田碧 [UMA/design farm]